地域社会における円環的発達支援－答志島寝屋子制度の変容と存続－

内山 淳子
（佛教大学（非））

【要旨】
近年、各自治体においては地域の教育力の向上が課題とされている。子どもを育む豊かな人間環境は旧来の共同体では日常的であった。しかし、現代社会では、大人の側に、次世代に文化や知恵を引き継ごうとする強い意思が求められる。
本稿では、青年期に近隣の知人と擬制的親子関係を結ぶ若者宿の一形態である「寝屋子」が存続する共同体に注目する。現地観察および聞き取り調査を行ってこの風習の教育機能の歴史的変容をたどり、各世代の発達と当該地域の教育力について検討した。現代の寝屋子は青年期の社会教育機能としては変容が見られたが、年中行事での青年の役割などにアイデンティティを保ち、地域社会の結束力の源として存続している。しかも、この機能は、新たなまちづくりの活動にも活かされている。

はじめに

現代の地域社会における人のつながりの希薄さは、子どもたちの生育環境に変化をもたらしている。地域の教育力向上が中心課題の一つとされた次世代育成支援対策法（平成17年）制定以降、各自治体では、年少の子どもと両親を支援する「子育てサポーター・リーダー」および「ファミリーサポート事業」の整備、「放課後子どもプラン」等の施策が進められている[1)]。青少年期の自立に関しては「青年自立・挑戦プラン」[2)]があげられる。いずれも「孤立化の時代を生きていかなければならない子ども達の人間関係の拡充」[3)]の必要性をふまえ、失われつつある地域の相互扶助のしくみを再構築していこうとするものである。

次世代を育む営みは成人の発達にも関連する。エリクソンは成人前期の発達課題を「親密」、成人後期では「世代性」、高齢期では「統合」とした[4)]。これは、生涯発達とは他者とかかわり支援するなかで達成され、「育てられる者」がやがては「育てる者」となる個人のライフサイクルを示している。しかも、このサイクルは世代を継承しながら繰り返していく円環的なサイクルでもある。森昭はこれを、個人の生の「(a)自己完結性と(b)時代連鎖性との両面を、一語で言い表そうとする概念」[5)]とし、その起源を、自己実現を目的とする「直線的時間観」をもつ現代人が失った円環的時間に求めている[6)]。地域の教育力とは「個人」と「世代」というこの二つのサイクルによるものではなかろうか。

三重県鳥羽市答志町答志地区は、大正期までは全国にみられた若者宿（寝屋子）が現存する地域である[7)]。中学卒業後の青年は近隣の寝屋親と擬制的親子関係を結び、約10年の間夕食後から翌朝までを同年齢の寝屋子朋輩と共に寝屋親の家で過ごす。26歳で寝屋に泊まることはなくなるが、寝屋親との、また朋輩との親密な親交は生涯続いていく。住民の移動が比較的少ない離島では、前述の円環的なライフサイクルが歴史的に営まれてきた。寝屋子という風習がこれを基底で支えてきたといえる。

現在、答志では他地域で既に消滅した寝屋子が続いているものの、状況は大きく変化している。しかし、寝屋子制度の変容のなかにも地縁による人づくりの文化は存続しており、さらに現代の課題解決を協議する地域づくりが始まっていた。

1．研究の目的と背景

本稿の目的は、地域で人を育てる営みの原型を円環的発達支援としてとらえ、この事例として、答志地区の地域文化継承の経緯と現状を取り上げ考察することにある。はじめに、寝屋子の社会的はたらきについて文献より検討する。

民俗学の上で、答志地区の寝屋子は、青年期の年齢集団である若者組（若者仲間）が宿親の個人宅を寝宿として、仕事、食事以外の時間を共に過ごす「若者宿」の一形態にあたる[8]。

日本の子育てにおいて、子どもが実親以外に幼少期から擬制親子関係を結ぶ慣習は各地に見られる[9]。さらに成長の過程では、「子どもが 13 歳ぐらいになると、親はいよいよ精神的乳離れのための心がまえ」をし「15 歳になるとはっきりと区切りをつけて、公の仕事に参加させ、それ以後は家の中でも村の生活でも一人前の若い衆として、取り扱った」[10]のように、子どもの自立には社会参加が必要とされ、成人への通過儀礼となった。

その一方で、青年は地域社会に貢献する義務を担い、社会生活では年齢集団として現れる。福田アジオは、青年期の年齢集団である若者組にみられる「ネヤドの制度」は、「若者組が家もしくは家長の統制を脱していることをもっともよく示す」としながらも、しかし共同体全体から見れば若者組も「ムラの制度であり、ムラの運営執行を分担し、若者をムラの一人前の成員に教育する組織」であるとしている[11]。

社会教育学の立場から、若者組が資本主義の展開過程のなかで青年団として再編成されていく経緯を研究した佐藤守は、その一環として答志島の一村落、「桃取若者組（寝屋子）」「桃取青年団」を研究している[12]。なお、この桃取地区（旧桃取村）の寝屋子は公刊（昭和 45 年）後の昭和 40 年代後半に消滅している。

佐藤は、寝屋制度は青年集団の原初的形態であるとし、「生活・生産上の機能、および婚姻的機能」を通じた「広い意味の教育がそこに見られる」とする。生活・生産上の機能とは、朋輩とともに行う地先漁業での難破船の救助、火番、船や網の補修などである。さらに、「宿親は寝屋子に対する教師」とし、実親・実子の関係とは違った「客観的な判断がそこに生まれてくることが可能」であるとする一方、「寝屋における教育的機能は、必ずしも宿親の一方的な説得にあるのではなくて、具体的な村落生活と生産に結びついて発現していくものであり、さらに寝屋子同志の切磋琢磨においてみられる」と説いた。

これらの寝屋子の日常生活は、今回の答志地区調査での旧来の寝屋子機能（4－（1））と同様であり、青年期の社会教育機能を担っていたといえる。異なる点としては、桃取では地域の祭礼に際し村内の「頭屋仲間」の役割が大きく、若者衆との関連はみられないのに対し、答志では寝屋子世代の青年が中心的な役割をもつ（5に詳述）。

また、戦後の青年団の活動として、桃取では創作演劇の文化活動が盛んになるが、佐藤は当時既に「第一に青年層の居住と職業形態が相似していること、第二に婚姻が村内婚を原則とすること」という寝屋子の存続条件が青年層の村外流出により崩れつつあるとし、

代わって今後は「同志的な結合にもとづく新しい小集団の青年集団」が発生するであろうと予見していた。これらをふまえ、答志の寝屋子の現状をみていきたい。

2．研究の方法

寝屋子は土地の住民のあいだで暗黙知として意識されずに続いてきた風習である。それゆえ、条目などの規約は存在せず、現地に残る文献資料は極めて少ない。同時に、寝屋子制度は自治組織、祭祀、葬送などの伝統的生活文化の一部であり、その機能を独立して述べることが困難である。そこで、本稿では平成16年6月から平成20年2月までの期間、継続的に現地聞き取り調査行うとともに、平成19年5月に青年団員に対して生活状況を尋ねる質問紙調査も行い、現在の寝屋子制度の教育機能について検討を試みた。

以下に調査結果として、1. 調査地区の概要、2. 寝屋子の状況、3. 答志の伝統行事「神祭」における青年の役割、4. 新たなまちづくりの活動について記述し、考察を行う。

3．調査対象地区「答志地区」の概観

(1) 地区の形状、人口、産業

答志島は伊勢湾内の鳥羽市の離島（答志島、菅島、神島、坂手島）のなかで最大の島である。東西約6㎞、南北約1.5㎞、面積6.98㎞^{2}の島の大半は小高い山地で、自給用の田畑も見られる。調査対象地区は答志島の3地区、答志・和具・桃取のうち、寝屋子制度が存続している答志地区である。

平成20年1月現在、島内人口2768人のうち答志地区人口は1385人であり、約6割に当たるおよそ800人が漁業に従事している。海岸から山手に向けて通る路地に家々が向かい合って立ち並ぶ。高齢化率は28.7%で、鳥羽市全体の同27.6%に比べてやや高いが、離島地区の平均高齢化率34.7%に対しては低い。島内には保育園2校、小学校2校、中学校1校がある。高校へは答志～鳥羽間を約35分でつなぐ定期船での通学となる。

(2) 答志地区の自治組織と役割

表1は答志地区の自治組織と年中行事である「神祭（じんさい）」での役割である。男性の地域内の役割には年齢階梯の名残が見られる。

表1　答志地区の自治組織と「神祭」での役割

名称	構成員(歳・性別)	役割と特徴
青年団	16～26・男女	男子は寝屋子に入る年齢、神祭の働き手の中心
消防団	24～約40・男性	消防の点検・訓練・海難救助活動、神祭の警備
漁協所青壮年部	26～約50・漁協員	消防団と掛け持ちをする人も多い
漁協組合	約50以降・漁協幹部	漁業関連の指揮、神祭の統括
町内会	約50以降・男性	生活全般の決定・連絡。不燃ごみ処理・広報など
婦人会	任意・女性	近年は島に嫁ぐ女性の支援
文化保存会	任意・男女	有形無形の文化財を継承、神祭の歌舞伎の指導
十体(じゅうたい)	世襲制・男性	神祭における伝統芸能実施、舞台背景等の指導
老人会	65以上・男女	長老的な存在、会員数は390名前後で推移
答志島活性化21委員会	26～70代・男女	近年活動を開始したまちづくりの団体(後述)

4．答志地区の寝屋子の現状

(1) 答志地区の寝屋子の歴史

古老の談話からは、寝屋子が各人の青年期に重要な役割をもっていたことが分かる。

（鎌田金一氏：大正7年生まれ談）「大工、漁師、左官などの6人で寝屋子を組んでいた。寝屋子は漁の情報交換の場であり、世渡りの基礎を学ぶところだった。実の親より寝屋親の意見のほうが優先だった。シナ事変では昭和14年に入隊し白兵戦で負傷。移送された名古屋の病院で1年療養し16年12月に答志に戻った。16年の大東亜戦争勃発で寝屋子は解散となっていた」。

（浜口由男氏：大正15年生まれ談）「尋常高等小学校卒業後、試験を受けて国鉄の職員となり鳥羽駅に勤務した。寝屋子朋輩たちは軍需工場で仕事をする者が多かった。戦時中、鳥羽はこの辺りの始発駅だったから多くの人を見送った。昭和18年に志願して海軍特攻となり20年に答志へ復員、朋輩も戻ってきた。既に職はなくその時から漁を始めたので、寝屋でも教わりながら漁のやり方を覚えた。（中略）当時は船に計器などなく、場所が分からなくなったら山手を見て三点方位で場所が分かる。今は機械があるから若い漁師に教えることも少なくなった」。

（山下善次郎氏：昭和6年生まれ談）「島では次男以下は分家をする土地がないために、大阪や名古屋の町へ出て大工や左官の見習い職人になり、養子に行くのが普通だった。島に残る長男の数も限られ、フナオロシの時に若い衆が集まるために寝屋子が便利だった。だから寝屋子の中にも7歳くらいの歳の差があった。先輩の言うことは寝屋親と同じ様に絶対。年齢順に役割が決まっていて、それでしつけられ、鍛えられてきた」。

戦時中を除き、寝屋子は継続している。土地が限られている離島の条件から長男のみが寝屋子に入るとされるが、近年は土地に残る次男が寝屋子に入る例もあり厳格でない。次男以下が寝屋子に入らないのは、寝屋子は朋友会（後述）の冠婚葬祭への協力が慣例であり、遠方から度々帰省するのを避ける気遣いからとも言われる。答志では、昭和40年代後半から高校への進学率が上がり同学年の者で寝屋子を組むようになったため、寝屋子の中に年齢差はなくなった。また、戦後は寝屋子と青年団活動は並存してきた。

(2) 寝屋子による地域のつながり

現在も答志では長男（島に残る予定の男子）は16歳から同学年ごとに寝屋子を組むのが通例である。最年長の寝屋子の1名が青年団長となり、2月末の神祭が終わると26歳の青年は「青年団」を退団して日常的に寝屋に泊まることはなくなる。新しく高校1年男子の寝屋子が始まるので、島には常時10の寝屋子が存在することになる。

寝屋子の現状は、高校時代に下宿をする者もあり、自宅通学でもクラブ活動があるため週末だけ寝屋に泊まることが多い。しかし、地元の学校教師は、「かえって最近は同年の子を持つ親同士が寝屋親を探すのが早くなっている。中学1年の頃から『どこへ頼もうか』と相談し始めて、2年の終りには決まっているようだ。若い世代も寝屋子を無くすことは考えていないと感じる」と話す。島内当該学区の小学校の児童数は、最も多い時代には45人2クラスだったが、今は20人1クラスである。答志地区の男子は5人ほどであり、寝屋子が1組できることになる。

表2は平成20年2月現在の答志地区寝屋子の状況である。各寝屋子は屋号で呼ばれる。

表2 答志の寝屋子の状況(平成20年2月現在)

寝屋子屋号	寝屋親/年齢(歳)	寝屋子年齢(歳)	構成人数(人)	寝屋子の属性と内訳
久太郎寝屋子	山下勝久/48	26	9	漁師5・社会人4
佐良寝屋子	中村佐良/50	25	8	漁師3・社会人5
幸康寝屋子	勢力幸康/36	24	7	社会人7
嘉七寝屋子	永富司/53	23	5	漁師1・社会人3
○キ(マルキ)寝屋子	山下猛/42	22	7	漁師4・社会人3
春吉寝屋子	橋本善文/59	21	6	漁師1・学生2・社会人3
浜保寝屋子	浜崎靖導/60	20	4	学生2・社会人2
幸太郎寝屋子	橋本政幸/38	19	7	漁師1・学生1・社会人5
九七寝屋子	浜口峰明/38	17・18	6	高校2年・3年合同
○九(マルク)寝屋子	中村貢/60	16	3	高校1年
米吉寝屋子	山下元哉/38	15	4	平成20年4月より開始

※社会人は、会社員、旅館業、燃料販売業、公務員など。

一般的に寝屋親同士の横のつながりは特にはない。寝屋親の年齢は様々だが、寝屋親自身も寝屋子に入っていた時期がありそれぞれが寝屋親をもつ。寝屋子は26歳以降、年齢の近い寝屋子同士が朋友会として組織を組み直す。朋友会は厄歳が重ならず、祝い事などにも支障がないと言われる。寝屋子は解散後も寝屋親をオヤジさんと呼び、立場は変らない。

「寝屋子の間の付き合いは、10年の世話よりも後のほうが長い。気のあった朋輩同士が2、3組合同で朋友会を組む。朋友の出番は、墓堀りをはじめとした葬式の手配、家の建前、船を作った時の祝いなどがある。答志には火葬場がないため土葬を行った。最近は鳥羽で火葬をして島の寺で供養をして埋葬するが今も墓堀りはある。大変なことは何でも朋輩が進んで引き受ける(70代)」「寝屋子は島の男性の朋友会組織とつながっている根っこのようなもので、答志の人は、親戚とは別の組織(朋友会)をもっていることになる。何かあった時には頼りになる(50代)」とされ、寝屋子を単位とした朋友会は島の人間関係の基盤となっている。結婚後は妻を交え家族での付き合いとなる。

(3) 寝屋親—育てる者—からみた寝屋子制度

寝屋親は10年にわたり寝屋子と共に過ごし世話をする。以下は表2の寝屋親の一人、浜崎靖導氏(60歳)の寝屋子経歴である。寝屋子が寝屋親になる事例であり、寝屋子制度が連鎖的な循環性をもつことを示している。

〈昭和22年〉「眼鏡屋寝屋子」(寝屋親:浜崎保男　寝屋子9名)の実子として生まれる。幼少期には家に来る寝屋子たちに遊んでもらった思い出がある。ちなみに、眼鏡屋寝屋子のうち2名が後に寝屋親となった。

〈昭和38年〉「定洋寝屋子」(寝屋親:山下定洋　寝屋子6名)に10年間入る。同級生の男子は19名あり、他に丸一寝屋子、虎男寝屋子の3つの寝屋子に別れた。寝屋親は旅館業を営む。寝屋子解散後、朋友会は11名で組む。

〈平成16年〉「浜保寝屋子」の寝屋親となり、4名の高校1年生を預かる。

浜崎氏は寝屋子を始めた平成16年当時、寝屋親になった経緯を次のように語っていた。

「私の寝屋子たちが中学2年の時に、一人の親御さんから寝屋親になってほしいと頼まれたが、仕事も忙しく断っていた。中学3年になって4組の両親がそろって頼みに来られた。家の事情もおじいさんが亡くなり、子ども達が巣立って部屋が空いていた。自分の父親も寝屋親だったので、これも役回りかなと思って引き受けた」。さらに、平成17年には寝屋親の役割について、「普段の役割は特にない。これから大切だと思うのは、高校を出て進路を決める時、嫁さんをもらう時といった節目の時。私の意見も自分の親の話も聞いて、仲間とも話して自分で決めていけばいい。その時に大きな役目があるかなと思っている。（中略）夜になると私の友達がやってきて、酒を飲んで話をすることもある。そこへ子どもたちもやってくる。そうすると皆でいろんな話をすることになる。私がたまたま寝屋親をやっているが、島の皆で育てているという事だと思う」としていた。

「浜保寝屋子」の寝屋子たちは平成20年現在20歳になる。高校卒業後2名就職、2名進学と全員が県外で生活しており、長期の休みに寝屋に集まる。共に世話をしてきた妻は、寝屋子たちが島外へ出ることを「自分の子どもとはまた違った気持ちで応援している。休みに帰ってくるのが楽しみ」として、寝屋子の部屋はそのままに残している。島内外在住に関わらず、青年期の居場所として寝屋子は確保されている。

他に寝屋親経験者は、寝屋親になった経緯を次のように話している。

（30代の寝屋親談）「鈴鹿で結婚した嫁さんを連れて26歳の時に島に戻った。その頃、寝屋親を頼まれた。自分は若いと思ったけれど、兄の寝屋親でもある親戚の叔父さんに頼まれて7人の寝屋子の親を引き受けることになった。寝屋親を頼まれるのは実親に認められたことであり名誉でもある。寝屋子とは大して年が違わないので、世話をする妻のことを寝屋子たちは姉さんと呼ぶし、今年中3と小6の（実の）子ども達もお兄さんとして思っている」。

（60代の寝屋親談）「同居している自分の息子が2年前に寝屋親を引き受け、今家には高校生の寝屋子が来ている。寝屋子を頼みに来る親の中には、私が寝屋親だったときの子などの断れない人が入ってくる。自分たちも他人の親に育てられてきた感謝の気持ちがある。だから、一つでも部屋が空いていれば引き受けることが自然で、断る理由がない」。

また、寝屋親の役割は次のように語られる。

（50代の寝屋親談）「寝屋子を取るときには6畳の部屋を用意した。寝屋親は家族の協力がなければ出来ない。寝屋に入る時は、母親が寝具を運んでくるが、これを干すのも妻、実際の世話は妻がすることになる。寝屋子には特に教育をしたという意識はないが、いつも何かの時には責任を感じていたし、これからも同じ。寝屋子を引き受けることは、仲人をすることと同じで一生付き合うことを了解している」。

（60代の寝屋親談）「寝屋親として一番嬉しかったのは寝屋子が結婚した時だ。ずっと見てきた寝屋子が一人前になってくれたことに安心して嬉しかった」。

聞き取り調査からは、現在の寝屋親は寝屋子たちを指導する意識は弱く、むしろ「見守り」「支援」に近い。日頃は青年期の寝屋子たちの成長を見守り、迷った時や困った時の「節目」には信頼のおける相談者となる。実の子どもではないという距離感は客観的な判断にもつながる。この点で、寝屋親はインフォーマルなメンターにあたる。短期的目標をもつ指導者ではなく、どこかで役に立てばよいという発達支援者の役割といえる。

(4) 寝屋子—育てられる者—からみた寝屋子制度

近年は、上記の浜保寝屋子のように高校卒業後に島外へ出る青年が増えている。しかし、一旦島外で過ごした後に島に戻り仕事をする青年も多い。表2で最年長の「久太郎寝屋子」9名では在島者4名中3名、「佐良寝屋子」8名では在島者5名中3名が高校卒業後に会社員、調理師、大学生として島外で数年間生活した後、地元に戻っている。

平成19年度に青年団長を務めた青年は、「長男だが卒業する時には島外で就職したかった。働いて3年目に将来のことを考え、答志に戻り漁を始めた。同じ寝屋子の友だちもその半年後に戻ってきたので、相談して（自分たちにとって新しい）ばちあみ漁を始めた」とふり返る。母親は、「長男だからいずれは帰ってほしかったが、もう少し後でもいいと思っていた。本人が若い今のうちに漁師を始めたいと言って決めた。帰ってきたときには金銭感覚もしっかりして変ったと感じた」と話す。

また同年の一人は漁師を継ぐことはなかったが、他県で大学と就職の7年を過ごした後、島から通うこともできる地元公務員の仕事に就いた。「現在は学校給食関連の部署にいるので、答志の食材を活用できないかと考え、知り合いの漁協の人と栄養士の双方に相談を始めた。地元と行政をつなぐ役目となれればと思う」と話している。一方で、より若い20代の青年は、「高校を出てから一度は島の外で就職することを両親に勧められたが、自分は残りたかった」として漁師になった。次男ではあるが漁が好きで、兄と一緒に兄弟舟で漁師を営む人もある。現代の答志の青年たちは自ら地元とのかかわり方を考え、職業や生き方を選択していた。

それでは、彼らの寝屋親や朋輩との関係はどうであろうか。

「親が頼んでくれた寝屋親だったので、行こうと思った。始めは少し緊張した（10代）」。

「寝屋子に入った中学3年の春休みは楽しくて修学旅行の気分で毎日泊まっていた。オヤジさん（寝屋親）には高校の時は叱られた思い出があるが、仕事をしてからは様子を聞いてくれるようになり、段々と話をするようになった（20代）」。

「親の言う事は聞かなかったが、寝屋親から呼び出しがあると恐くて、皆でドキドキした。でも、自分の親とは違ってワイワイやって何でも話が出来る（30代）」のように、寝屋親との関係は歳を経るうちに親密になり、話し合える関係になっていく。

また、寝屋子朋輩同士の関係は、「（冠婚葬祭以外に）仕事のことでも『ちょっと来てくれ』と気兼ねなく言える。例えば船の機械で調子が悪い時はすぐに電話して聞く。そうすると『見てみな分からへんわ』といって気軽に来てくれる。できることは自分達でお金をかけずに解決する。都会では金で何でも解決できるが、次に残らない。仲間同士で頼むと、ありがとうという気持ちが湧いてきて、また自分も相手のために頑張ってやろうという気になる（30代）」と兄弟同様の付き合いである。

その一方で他の寝屋子に対しては、30代では「若い時は他の寝屋子とはライバル意識がある。だから切磋琢磨して、何をやっても負けたくなかった。他がやっていて、いいなと思うと自分達もやってみようかと思った」とされるが、20代では、「高校時代は、金曜の夜からあまり歳の違わない別の寝屋子たちも一緒に寝屋子に集まった。高校でも学年差はあっても答志出身者は皆親しい」という証言がある。現在の青年たちの言動からは近年寝屋子同士の競争心は薄く、島の若者全体が親密であるように伺える。

5．答志地区の伝統行事「神祭」

(1) 神祭の伝統と人々のくらし

答志の年中行事には天王祭、盆祭などがあるが、青年の役割が顕著である「神祭」は最も重要とされる。平成19年3月および平成20年2月に「神祭」の現地調査を行った。

例年旧正月の17日から3日間にわたり、海上の安全と豊漁を祈る神事を中心とした「神祭」が行われる。島民の老若男女が参加し、舞台では連日、歌舞伎や演劇、歌などが上演される。祭の要所は中日の満潮時に行われる八幡信仰の的射神事、「お的（まと）」である。神事の内容は、氏神の遣い「お的衆」の既婚男性7名が「東の浜」で禊をし（「コリをかく」）た後に神木で皿状の「ショウギ」を組み、氏神の化身とされる消炭粉と海苔の混ぜ物をショウギに載せて祭会場へ走り込む。島民はこの炭を奪い合って手に付け、家々の軒先に丸八の印を描くと1年の息災が祈願される。翌日ショウギの木は御札として各家へ配られる。

「お的衆」入場の前には、青年団の若年層が身体をぶつけ合って緊張感を高め（「アバレ」）、次に青年団員7名が「七人使い」として入場し、舞台上でお的衆の到着を待つ。お的衆が舞台で的を射ることで神事は終了するが、その前後には奉納芝居として「受け芝居（的を受けるの意）」の歌舞伎が上演され、続いて世襲制の「十体」の人々によって獅子舞が行われる。神事の後は島の自治組織を単位とした演芸が再開される。

かつて、神祭は島民の生活リズムをも司っていた。「娘さんは、神祭の前になると住み込みで働く土地から島へ帰ってきて、それから冬の間お針子をして島で過ごし、初夏に海女作業の練習をしてまた半年間の奉公に出た。だから、神祭前は娘さんたちと再会し一緒に青年団活動ができる楽しみな時期だった（60代）」と島の人はふり返る。

現在の神祭は、「次男なので大阪に住んでいるが毎年神祭には帰って親戚の家で過ごす」、「八日市に嫁いだ娘が神祭には孫を連れてきてくれる」といった、島民が集う機会でもある。さらに、10年前からは地元の保育園、小学校、中学校の子ども、および教員が踊りや合唱、演劇などの演目を行い参加協力している。

(2) 神祭での青年の役割

島を挙げて行われる神祭の担い手は寝屋子世代の青年たちである。成人期の消防団は警備に当たり、中年期の漁協組合は運営統括を行い、これまで祭を支えてきた長老たちは幼い曾孫を連れて観客席で見守る。青年たちは「十体」から指導を受け、神祭舞台の設備、音響、照明、進行などの裏方一切を取り仕切る。平成19年度現在、島内在住の37名の青年団員（高校生男女18名を含む）は、変わらず大きな責任と期待を担っている。

しかし、青年の人数の変化は祭りの進行に影響を与えていた。「受け芝居」は、元来数え年25歳の厄歳の青年が演じる習わしがあったが、平成17年度からは上の世代にあたる漁協青壮年部が行っている。また、「七人使い」はかつて三つの世古（地区）から年交代で独身青年が出て行った。「私たちが青年団の時は100名もの団員がいて、自分が青年（団）のうちにはとうとう七人使いの順番が回ってこなかった（50代）」と推移が語られる。昭和50年代初め頃までは各寝屋子がそれぞれ芝居等の出し物を上演し、「寝屋に集まり、他の寝屋子に負けないよう毎晩秘密で練習した（60代）」時代であった。

近年、寝屋子単位で行う出し物は高校3年の寝屋子が女子も交えて行う一組のみだが、青年団全体の芝居等は行われている。約1ヶ月前から仕事後に毎晩集まって計画を練り、

舞台稽古を行う。年齢差のある各寝屋子の集合体として、青年団が機能していた。青年団員の一人は「答志の特徴は結束力の強さだと思う。祭や行事で皆が集結するのは、それらが小さい頃からずっと身近であり、(始めから) あるものとして考えているからではないか」、また、別の団員は「伝統は守りたい。でも、良いところと悪いところを見極めていく時期にも来ていると思う」と話す。伝統を受け継ごうとする強い意識が伺える。

6．寝屋子制度の変容と存続 ― 伝統継承から現代的課題解決へ

以上のように、答志の寝屋子制度による青年期の社会教育機能は、旧来の生活・生産上の必然的な機能から、主に精神的な発達支援機能へと変容した。しかし、現在もこの地域の強い協力体制の基盤として存続しており、近年では次のような活動に繋がっている。

答志島では、平成14年度より住民主体の「答志島活性化21委員会」が答志・和具・桃取地区合同で活動を開始した。19年度は青年団から老人会までの各自治団体代表者、小中学校教職員ら38名が「地産地消」「後継者育成」「くらしと文化」の分科会にて活動した。

三つの分科会の活動は現地の課題と直結している。初期には、水産振興・観光振興イベントを中心に計画をしていたが、近年は文化の継承と後継者育成に力を注ぐ方向に変わってきた。「後継者育成」活動の一つに、「先達に学ぶ―釣り体験教室」がある。

委員会から老人会にベテラン漁師10名の講師を依頼し、小学生を対象とした「仕掛け作り」の教室を行う。後日、船を出してもらい、小学生数人ごとに乗り込んで一本釣りの体験をする。体験後には港で魚をさばき、婦人会によって用意された刺身と潮汁を食べる。漁協組合、小学校、PTA、老人会などの協力による学社連携の成果である。

一本釣り体験の講師を務めた漁師（昭和6年生まれ）は、若い頃を次のように回顧している。「私は尋常小学校2年に学徒動員で働いた。だから何の（学校の）免状も持っていないが、本を読んで芝居の脚本を書いた。横文字も勉強しておかなくてはと思い、ローマ字を覚えた。自分で努力すれば自然にリズムに乗れて上手くやっていける」。このような先達の生き方を若者に受け継ぐ機会は答志においても限られている。一方、「くらしと文化」分科会の「島外のお嫁さん教室」では、婦人会会員が中学校を利用して島外から嫁いだ女性に地元の料理やお菓子作りを教える。同時に心配事を聞く機会となり歓迎されている。

このような住民の学習活動を進めるなかでも、寝屋子制度によって培われた若い世代とベテラン世代とをつなぐ世代間ネットワークともいえる風土が活かされている。さらに、地域の生活向上への課題解決に向けて、活動を継続していくことが求められる。

おわりに

元来、寝屋子制度は無償奉仕であり、成文化された規約をもたず、住民の信頼関係に基づいている。「今も外で会う子ども達にはどこの子どもでも注意する。島外から来た小学校の先生は島の子どもの素直さに驚くというが、そんな習慣からではないか」と島民（昭和19年生まれ）は話す。調査においても、寝屋親―寝屋子の間柄だけでなく誰もが地域の子ども達を気にかける温かい環境が感じられ、これが地域の教育力となっている。

これまで、答志の寝屋子は社会や若者の変化に柔軟に対応してきた。必ずしも閉鎖的ではなく、島外へ出る若者をも応援する気風があった。その一方で、若者の活躍の場でもあ

る「神祭」をはじめとして地域文化を継承する誇りを共有できること、すなわち「拠り所」となる文化があることで、人々の人間関係は変らず深められてきた面もある。その意味で、地域の教育力とは、地域文化の醸成あるいは再発見に関わる問題であろう。

離島の現状は、行政支援の目が届きにくく、魚場の変化、少子高齢化等の様々な不安をかかえている。しかし、「若者が困っていることが、同じ経験をしてきた年配の者にはよく分かる」という島民の言葉が示すように、「円環的」といえる年長者から若者への支援に根ざした地域の連帯は、地域振興をめざす生涯学習のまちづくりに対しても大きな力となるのではないだろうか。

注記・引用文献

1) これらに関わる先行研究の例として、清國祐二「教育サポーター・学校支援ボランティア等による地域の教育力再生」(『日本生涯教育学会年報 28』、2007、pp.63-73)。加藤千佐子「『放課後子ども教室』の促進をソーシャル・キャピタルの視点から読み解く」(同上、pp.85-92)。
2) 文部科学省、厚生労働省、経済産業省、内閣府の4府省において平成15年策定。平成17年からは中学生を対象とした 5 日間の就業体験「キャリア・スタート・ウィーク」を実施している。文部科学省『平成18年度版・文部科学省白書』、第2部第1章参照。
3) 坂本登「変革期の青少年教育」(『日本生涯教育学会年報 26』、2005、p.130)。
4) エリクソン,E.H. (村瀬孝雄・近藤邦夫訳)『ライフサイクル、その完結』みすず書房、1989、p.73。ここでは成人期の課題 Generativity に対して「生殖性」の訳があるが、本稿では、鑪幹八郎『アイデンティティとライフサイクル論』ナカニシヤ出版、2002、p.156 に拠り「世代性」とした。
5) 森昭『人間形成原論』黎明書房、1985、p.214。同様の解釈として、西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会、1993、第5章第1節「ライフサイクルの二重性—完結と関連—」。
6) 森昭 前掲書、pp.189-194。
7) 現地において「寝屋子」とは、その制度自体と集まる青年の両方を指して使われる。答志島の寝屋子制度は鳥羽市の無形文化財の指定を受けている。
8) 若者組および若者宿に関連する調査は、その衰退に伴い昭和 40 年代以降減少する。平山和彦・宮原兎一「青年の社会生活」 和歌森太郎編 『志摩の民俗』吉川弘文館、1965 所収。岩田準一『鳥羽志摩の民族－志摩人の生活事典』「志摩の若者制度」鳥羽志摩文化研究会、1970 など。宿親をもたない施設型若者宿についての近年の研究に、中野泰『近代日本の青年宿－年齢と競争原理の民俗』吉川弘文館、2005。
9) 取上親、乳付親、名付親、拾い親など。弱々しい赤ん坊を無事に育て上げるには、大勢の人の助けが必要とされ、義理人情の「義理」とは仮親との関係から生まれたとされる。大藤ゆき『子育ての民俗』岩田書院、1999、pp.55-68。
10) 大藤ゆき『児やらい』岩崎美術社、1968、p.259。 共同体における青年期の社会教育運動として、鹿児島県の郷中教育、大原幽学が提唱した換子教育など。
11) 福田アジオ『日本村落の民族的構造』弘文社、1982、pp.120-121。
12) 佐藤守『日本近代青年集団史研究』御茶の水書房、1970、pp.361-378。

謝辞:本稿の調査にあたりご協力いただきました三重県鳥羽市答志町の皆様に厚く御礼申し上げます。
なお、本文中の氏名記載については、御本人の許可を得ております。